

小栗外傳二編

四

^ 13
3293
11



小き舟が去向を尋ね糸東國の御者と示し今せ早く中懐を遂入りので
さるめても小き舟の舟を改行せんと獨らちして居るに小垣を隔く。

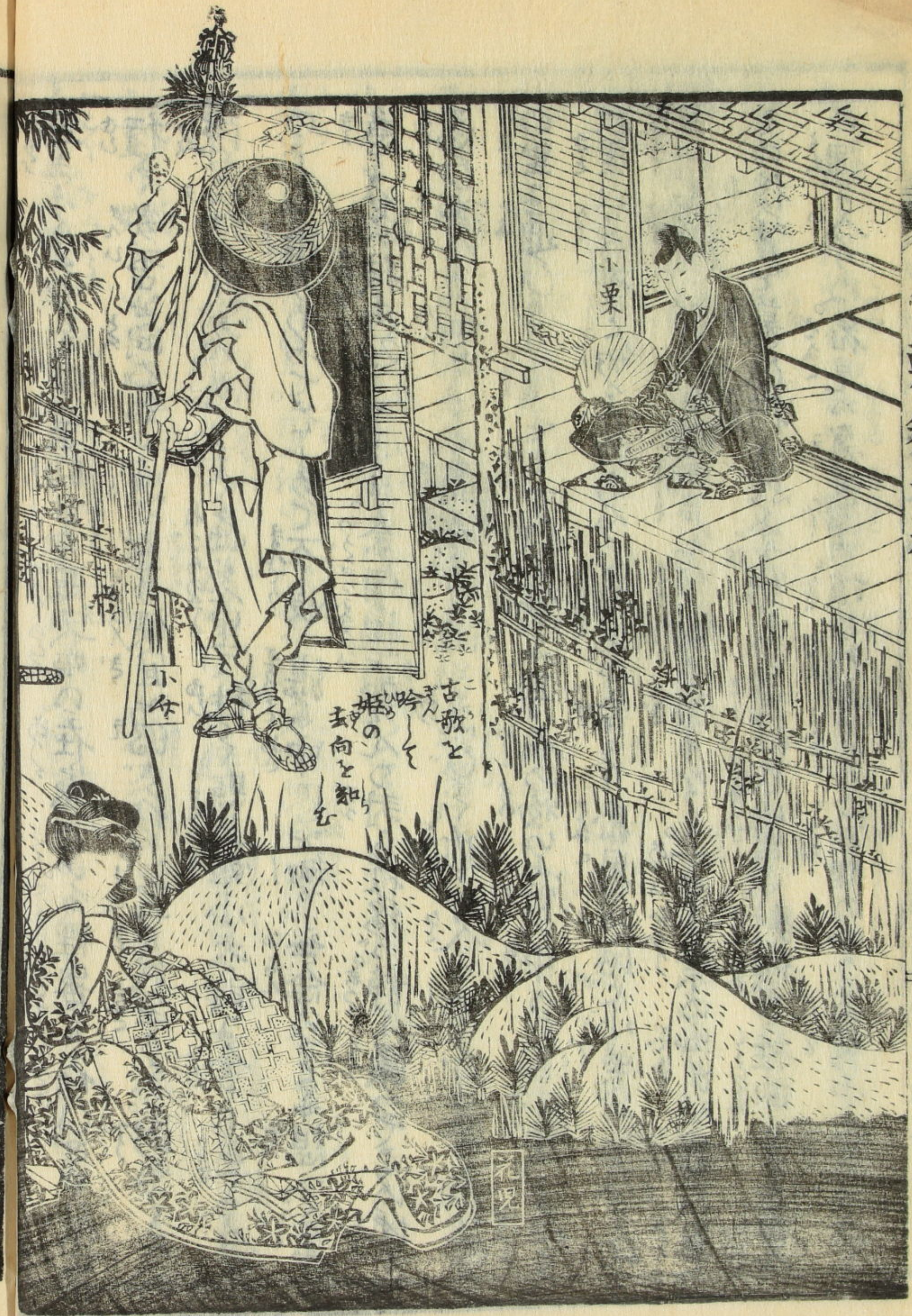
風の音にわらうさされてこれれとが藤屋の里に衣らつらん。

とうち吟ざるのりのり小栗寝るに今夏の首まで山郭は知能なるの哥
をこそ吟まざるにわらうさるれば持衣の音と誦するやん公とほざることかると
澗のうらたれ庭面の隔の柴折戸をひきき静ふ歩みするのりのり小栗
こまを熟するお五十にのまる翁之腰を曲り近よりて免されぬ某と
旅の修行者よとてさるが少く同まのりさるるのり此近に辺りよ藤屋の里
と一雨のぬが某前日彼正をこの南村とある小家の宿作りほろろ不ば
ぬのけさるは女房のひて彼女房のやとさるる奴家かまの此辺の長者が許お
あまさる縁故ありて行往にかるるをまを奴家か此正に居るをさるに足下の

下を修行とて歩み多るなり彼夜宿りも志多る奴家が此正に居るに
まよふしものれはし爾のぬれど此の明白お告多るまや我身よとさるに
からんと思へやと心をはざるこまと思へと余儀なく頼むを足下
せんも便さるればその何とや長老もてま婿の名をゆらういひまると同
長老の万長とらひぬ夫のこの世と憚るこのぬれが其の名をばやと容観
如此くまると思へやと熱く心もたぬ措づき神仏を巡れ此正に宿
うと足下をさるけとて然るは今絶不図も足下はえはるる女房のほ
容貌に似たればなりとさるるせまふうと思ひまるとら我身もあま
藤屋の里に古奇な吟の夢に庭面の風色を泳せしにあらんと爾らの
おほえやおほえやと問われば小栗をばをばてさるる我妻へ経のりの里に忍び
居るもや尚その実不白とせめて再びいと用人とさる折る障子とさると

おしり此家の女児花見と申殿へついに在り最前よりつづね
 はわらじり。何の樂しんたつり侍りしとあり小栗の折あき時こそ
 修りれ修行者と物結せしと云知らば思ひつふさあなれ修りて此
 旅人の迷國修行と巡ると父の國の名も跡を同じひしと面かして
 想を時を後しり。今おのの父をなや修り者も還軍あり。
 又こそおのめといひの修行老来は還軍と云えはよらむと云わぬ病
 思ひ言。今もて此家は居りはほど病おとりの果れぬ明日はくまぬ
 登足の内縁ゆひの重縁て見えよらぬ。只今清りゆひをよらぬ止ぬ
 るや。と云はれ故の趣へ入りおのりて小倉の裡らふ万長が許を立出産見里
 お至り。姫と小太郎おちまで鬪り力よりとせ入おたまでとれぬ池在りやす乃
 人々小栗殿へ今産見里おちまよはしと告あふと云やと東國のいふ

赴きり。つづね小栗助重の照天姫の在家と云る裡産見と云はれ彼亦
 行く安否を問ひやと思ふ。其便宜と云はれ。三五日たると漸くその
 隙をひらきしつづねひく産見里へ往り。照天姫小太郎を合し。至らぬの上
 のことを清りあて。そめて万長が謀中じを知り。急念のこも想へと事
 急せむ。彼亦怨を懐き。奈何禍かかんも討られ産見が静に激つてその地を
 忍び出ん。如すと高議して深くおのひく折く人の知らざるやうに産見
 の里を通ひり。陰とすれと産見耳石の物り世の中を小栗が産見
 此里に産見と知り。のめりて産見お告り。産見の此ほど小栗のいづく此
 出行を候りおのめり。此風を安んずき浪りなく。一日小栗の出しを産見の産見
 その後背を暮し行り。産見産見の里に山里に軒傾き柱曲と云る白昼
 の裡入りぬ。産見の身を潜め垣の外にすて家裡的やうを産見の産見と



化よ生もの何事ぞうちあかと思ひけくふ縁てより。小栗が色香も愛
 む。現在の妻の奴家ゆゑ露ぞうちも女へあつど隔あつ恨こそよと小栗を
 愛恤。どひも首より。爾くのゆめあれば斯るぞと宣ふ。なもてまゝなる
 ぶまき妻とほしてりあとも給事。さんぬ奴家が妻とおぼき縁が。さよと做
 るふとおぼゆれと。うち怨むれが助手。る面目なうは。俯へ回意せどして
 居るけし。先見その対照。天の對ひ奈何小栗よ。今まての口賢くも姫めなる。
 奉とせどとゆへ。主の男と痛くも。姫女もて。いりあぞや。主と欺く
 んでは。今我まを連行を尚よく止め支ゆる。と言語荒くも云放ち。ワリま
 小栗が。まを。りて。門支行人とあつりあ。はも。賢れ。照天。姫も。先見が。まは
 我りの。ゆ。な。さん。と。を。怒。を。発。し。面。を。赤。し。ひ。き。さ。が。め。知。く。後。が。爾。の。あ
 めれど。助。手。殿。と。奴。家。と。親。の。ゆ。せ。ま。婦。も。然。る。母。縁。故。ありて。ま。る。季。秋

此未あて。父上人も知る。常陸國の一城主名武常陸介。光君もく
 は。又我良人と宣つる。則ち汝が慕ふ殿を誰と。おりのぞ。
 関東の武名を。東に。若大。小栗判官代助。と知る。も。あ。び。や
 浅女。斯る。大。み。を。父。と。れ。が。ご。も。生。お。れ。が。持。ら。う。懐。妊。赤。ひ。り。
 胸の辺。お。ち。め。れ。の。照。天。姫。の。慌。忙。その。も。ま。さ。が。り。を。止。め。大。み。を。父。と。は。女
 かね。生。お。く。と。ら。る。我。良。人。の。心。の。上。と。漏。さ。ん。と。思。ひ。よ。じ。て。爾。と。と。ら。れ。
 この道理。よ。い。れ。れ。も。一。回。殿。は。添。卧。せ。女。の。あ。れ。が。今。此。而。て。殺。さ。ぬ。奴。家。う。妬
 め。て。お。と。ふ。命。殺。さ。ぬ。と。人。の。誹。謗。の。厭。も。も。殿。の。お。ほ。ま。ん。行。も。悪。く。ま。ご
 せ。う。人。の。奴。家。が。身。彼。が。家。に。買。さ。れ。お。付。も。主。と。執。り。る。因。縁。も。あ。ま。い
 止。む。今。更。め。て。道。理。を。よ。く。云。さ。さ。ん。眩。ま。な。て。化。は。漏。と。と。も。め。り。ま。だ。助
 へ。く。と。は。き。ね。と。云。へ。ど。小。を。即。ち。と。振。鳴。呼。愚。心。の。を。宣。め。ま。ま。大。功。の。細。僅。を

顧。と。と。り。や。昔。佐。木。高。綱。の。後。戸。の。派。と。先。陣。せ。ん。と。合。戦。の。夜。の
 一人。後。戸。の。忍。び。行。海。士。と。欺。れ。海。原。を。ま。又。異。人。の。教。え。と。を。残。り。も。海。士
 を。切。害。す。と。その。翌。日。浅。瀬。を。渡。つ。て。先。陣。一。數。百。歳。の。今。ま。も。只。と。と。し
 り。と。や。そ。と。退。り。人。姫。君。と。少。も。肯。め。ま。も。は。姫。の。め。も。留。め。り。し。と
 声。を。荒。ら。げ。て。汝。の。も。爾。の。ら。ら。女。人。と。助。と。も。さ。あ。て。の。害。の。あ。ら。は。し
 ま。れ。ど。女。の。主。れ。命。ゆ。え。斯。の。辞。し。と。は。は。え。り。は。く。奴。家。と。憎。ら。ぶ。免。角。分
 せ。う。と。せ。よ。と。怨。さ。る。言。語。よ。小。を。即。ち。後。の。害。と。思。へ。ど。主。命。乖。か。して
 遂。に。花。見。を。免。れ。り。花。見。早。く。も。身。を。記。照。天。小。對。ひ。涙。を。拂。ひ。情。け。く
 と。精。進。し。小。差。さ。し。殿。も。の。ろ。ろ。易。く。他。の。花。と。愛。ま。ひ。此。方。の。秋。風
 の。吹。ち。る。紅葉。の。色。失。て。疏。も。う。情。は。愛。仇。の。人。あ。も。せ。よ。命。の。降。ま。及。ぶ。を。と。て

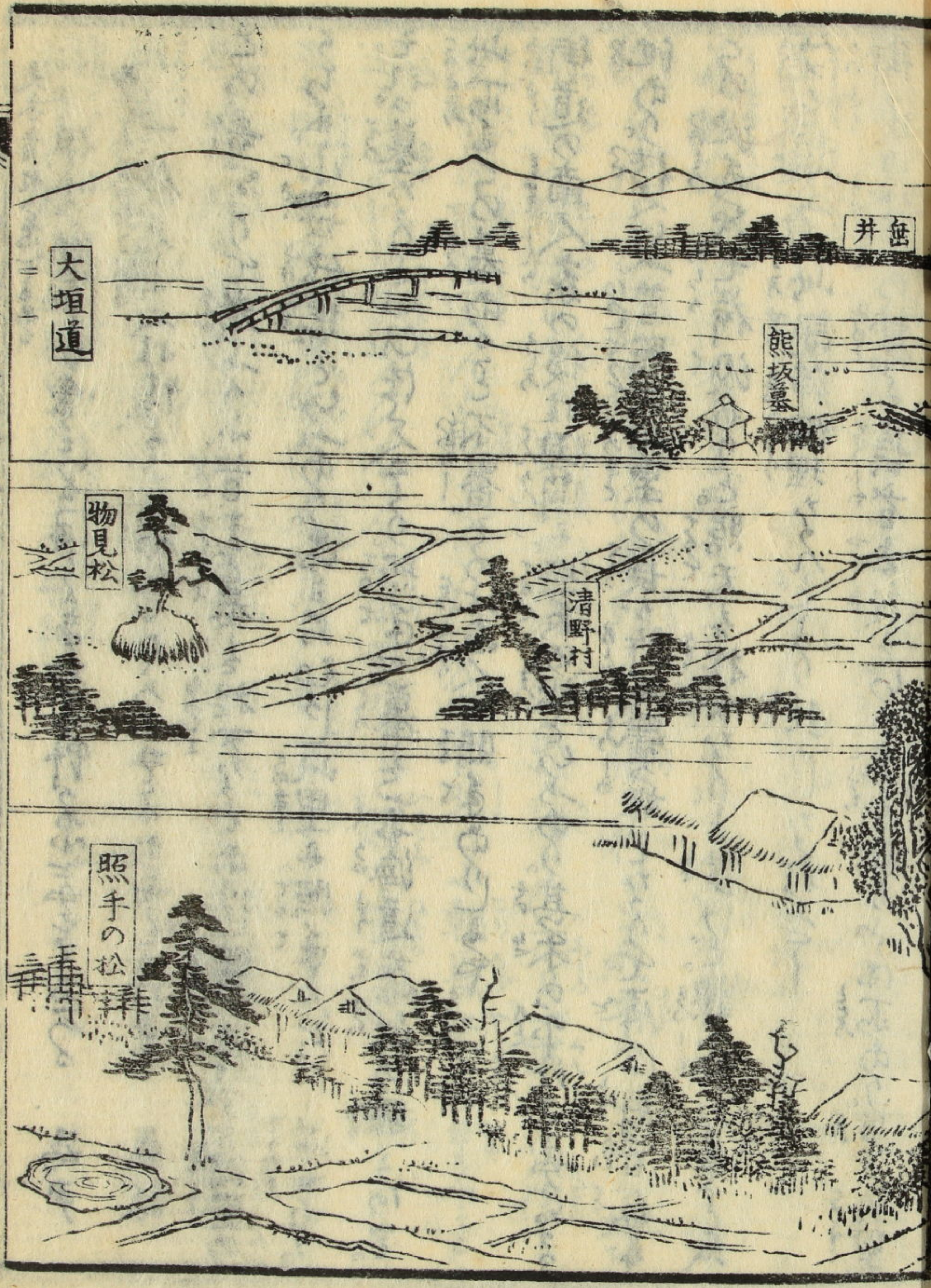
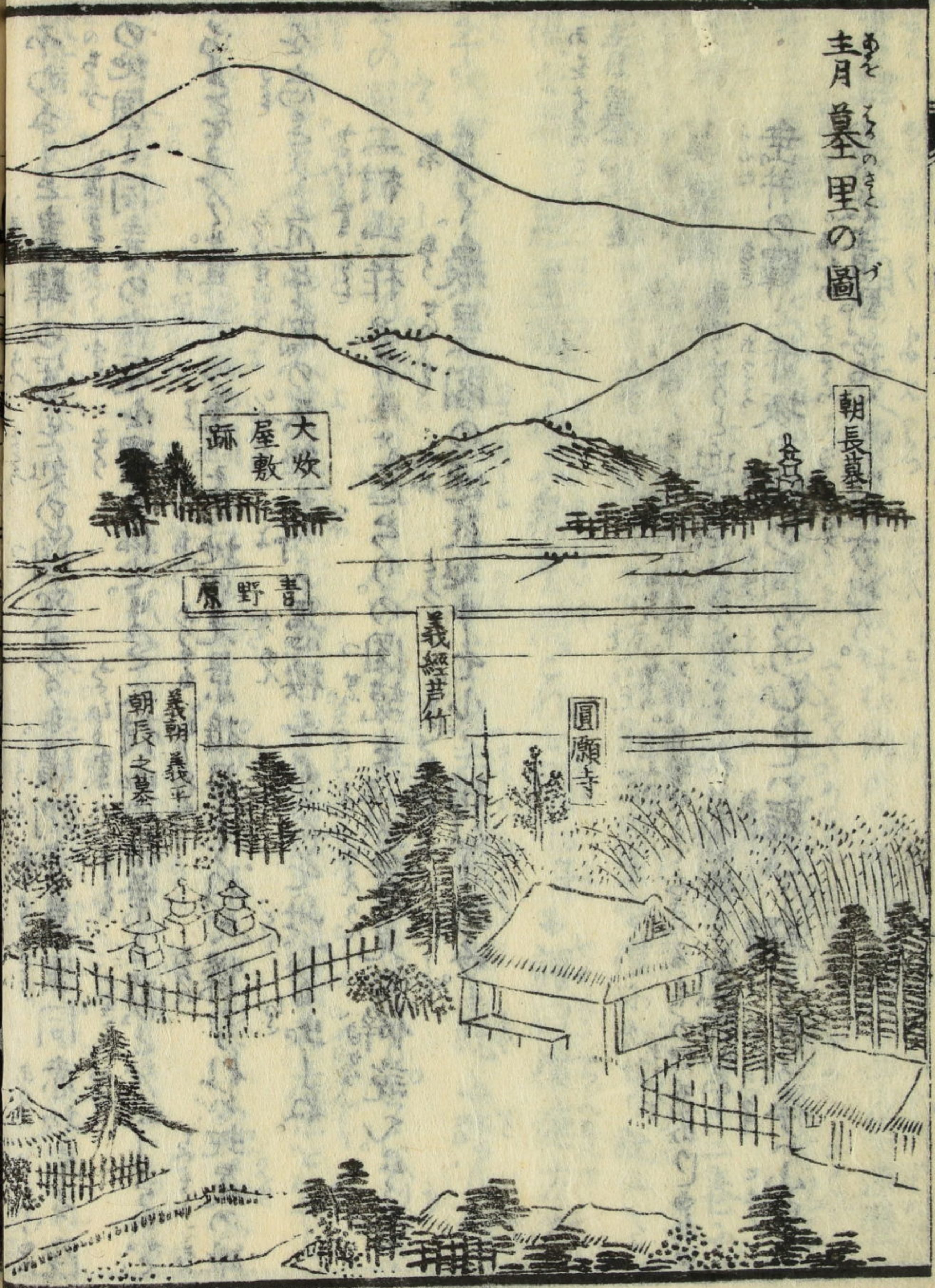
書肆衆星閣の主人曾々山水次第癖あり。生管の暇日四方を遊歴
 あり。各勝の地を巡る毎々其地方の風色名産古蹟を摸写して以て
 土儀とて於半々年あり。予今年寒燈夜話を編述し。後帙第々三巻中
 三洲二村山濃州青墓の里同赤坂宝光院の事僅小出せり。既にそ
 稿を脱し。衆星閣より傳へ衆星閣これを閲し。予曰僕遠方乃
 事未知くごとく以て今此書中載くまゝ三沢濃州中を既小出せり。粗
 その風土を知り。先生の述るまゝと其方位大相違あり。予以て
 想ふ所先生の必きく世の又まゝなるを念じ。幸彼地方の地圖名産亦を写し
 之れりのあり。今此書の因中より出せり。知らざれば人亦まゝとあが益なし
 とも又害おろしん願くは是が考知ありて此巻の後中出せり。多れとも
 此書の大旨中関らばはことありあはと衆星閣の老婆心を筆にせんも

不ぬる。と書肆の字と処の圖又入る。濃州青墓里同赤坂宝光院
 の地圖と同寺の古瓦を摺ると。まゝ二村山の紅葉と秋と成おし。うら
 らしきをせん。其昔の事。その地の光景推量せられて憐れぬ。蛇足の跡
 を忘る。衆星閣の云処。予が愚按をのりて此中出せぬ。
 二村山。柞之り。とことりの。圖説を予が管見の僻説。とて全
 多く衆星閣の述れ処中へ少く補ひしのみ。

青日墓里と

美濃國 昔の之野とあり。地圖は青野。文野。各勢地とて大まかなる。その郊外あり。ゆゑ
 岳井の驛と赤坂の驛の間なる。むらじの賑ひ。驛なり。今小里と
 なる。青野なる。此地方なり。

青墓里の圖



夫木青れりともある。

伊吹山さしも帝はるほくきとま評るふとせくる。 為尹

拾玉まをよめる。

一夜え一人仕情もあかへるころふあるあをころけさ。 為信

この奇をりて考ふるふ昔まを墓とせ女たごありし驛なほ一里の

らら小世作塚といふあり。まらむじ此里も照手といひ遊女あり。

それが墓なるといひはくきなり。照手が墓と東海道藤沢の驛なり。

此所もこの墓あること不審その比友人の照手ありしや。

街道の南人家の後れ田間も照天の松といふあり。其木の下にたつたる

池あり。昔照天此里の長が許女豊姫となりて居りし時日毎も

この池も水七荷汲めりと。照天を控女なりとせけど豊姫なること

此を想ふ此説津浦理なんどより起りしなるを。

街道の北山の麓も長者をなといふ木立あり。是れ北里

の長者大炊が住り跡なり。せ傍も朝長の墓あり昔平治の亂源の

義朝戦負く。僅八騎ありて此地方に落ちりぬ。この地の長者大炊とも

義朝交り流りしやと。あざくけ所止まり。寇を報へん討議を傲お

斯く居るんと然るくは義朝と尾張より行き。我平の孤軍と赴た。

朝長を信流す。下り東山東海の源氏を誅し。不日軍兵大敗す。

余極首の恥を雪ぐんと。既ちうちたんと。然るも朝長矢傷き。やうく

起こと社に。我朝これをもく甲斐なり。贈り蜜刺し。殺しとせ

こそ。則ちその屍を葬りし所なり。と里人の語りた。

街道の端も圓願寺といふ庵室の如き寺あり。其境内に。我朝。我平。

朝長二人の墓あり。石の五輪なり。

同寺に後にも我平の芦竹とて竹林あり。



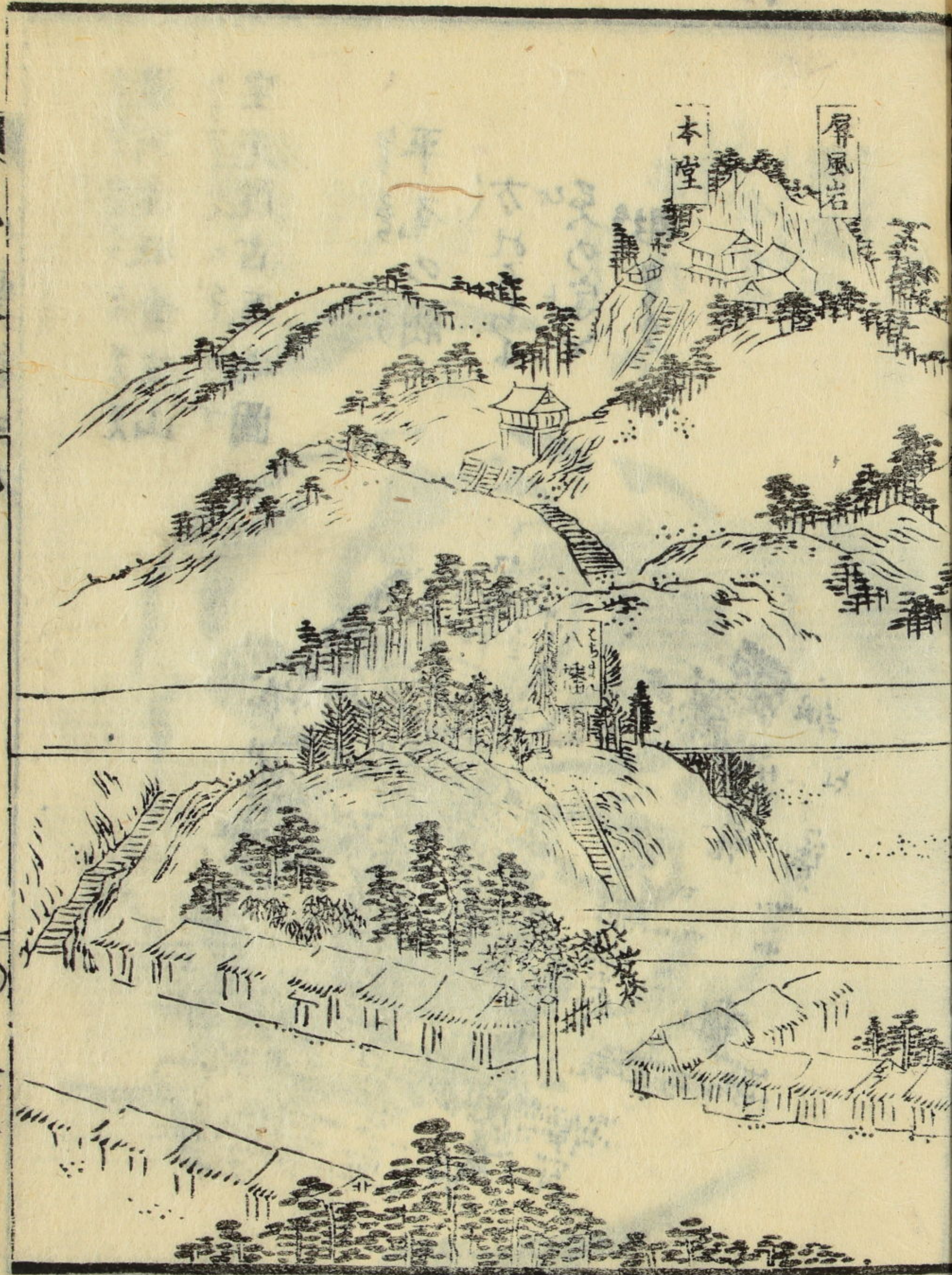
街道の北相川の方小室に於て松坂塚とて小堂あり。松坂を祀ぐ
ことと昔名を以て竊盜多し。世のよく知る所なれば。松坂を祀ぐ
おぼしめ南の方音野が原の左半町なる。音野の一本松といふ有本名
幣懸松又の名は物乞の松といふ傳り。昔朱雀帝の御宇。東夷
平将門王命を叛き。下総國相馬郡に居て乱を發せし。松坂
退治し。多るん為。南國中山金山太神に祈りて。敵中此松を祀
し。幣懸松と賞し。後遠の星霜を待て。仁安嘉應のころ。松坂
深林の松葉を坂長紀といふ。此より松葉穴とて。徒堂に集めて
旅客を却けし。其賤物と棄る。常此松よりて。旅客のすまを察し。是
を。それよりして物見松の名を負へり。古幣懸松の受名を賞せし。れ
今物見松の坊名あり。此木の不幸といふ。古代の松と西徳羊園

大風のよめ。松葉を吹倒さ。枯れ。その後松葉を祀ぐ。大木となり
枝葉榮えり。

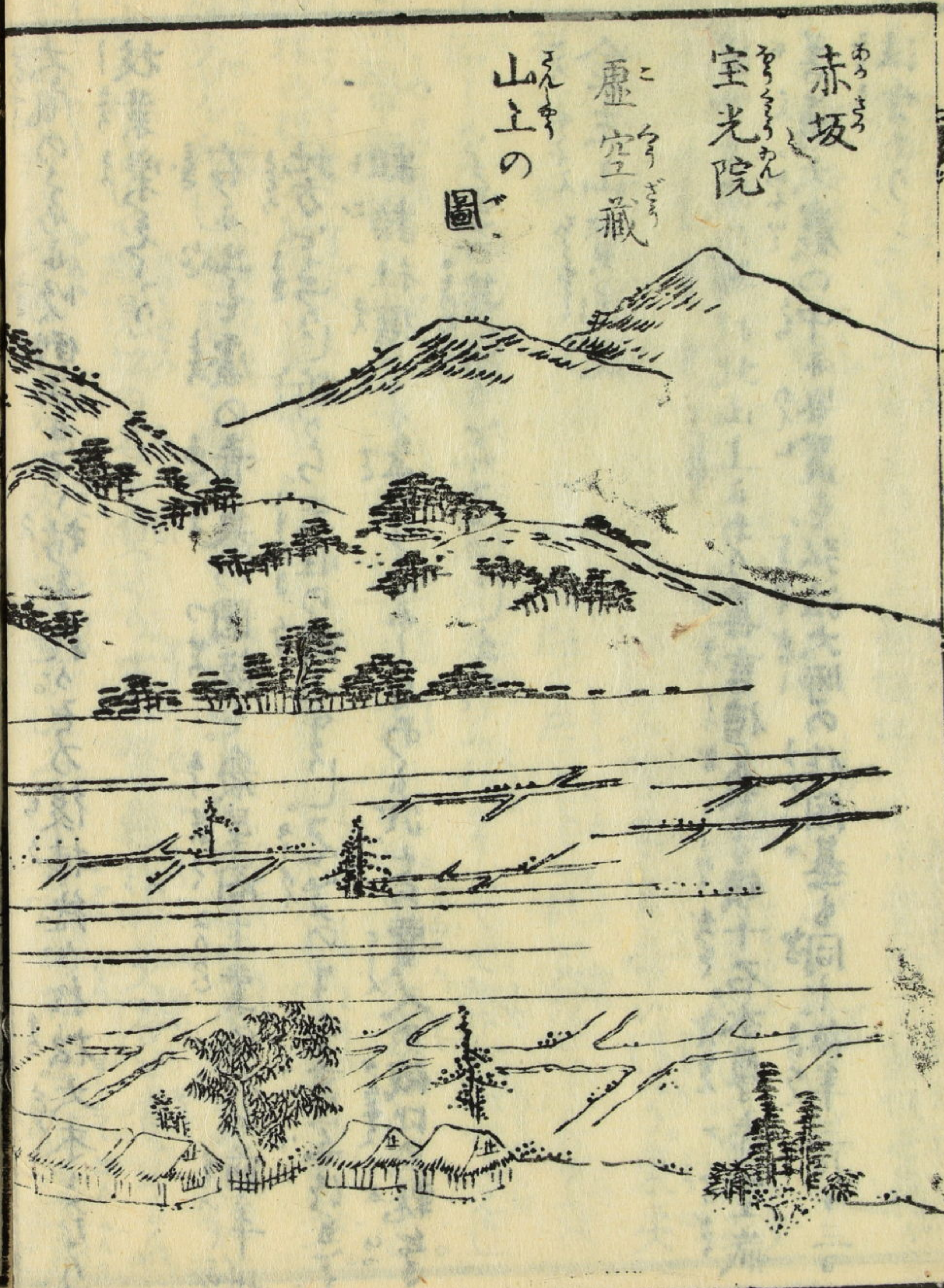
右の松とて。處の音墓の園説と。衆星閣生業のため。前年此
地方をりし折。天性の癖ありし。又松の書を記し。松葉の
粗語社撰。年々。松葉の。賈人の。俄比の。執事
其の。松葉の。松葉の。

金生山寶光院

濃州赤坂の驛。北山上あり。真言信我寺。領十石。本尊虚空藏
菩薩大巖の中。安置と。弘法大師の作。同。毎年三月十三日
法會あり。



赤坂
宝光院
虚空藏
山上の
圖



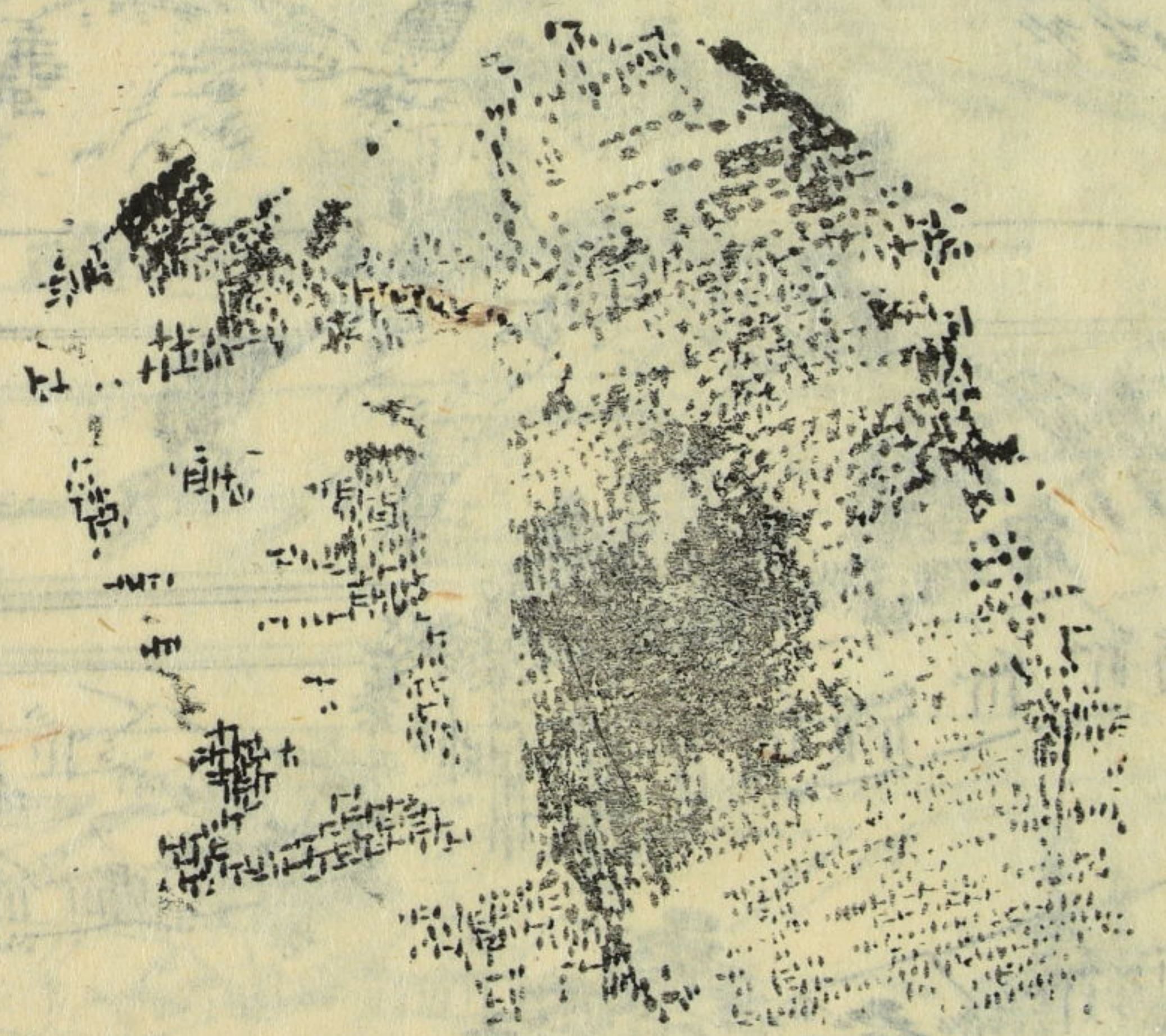
小栗卷之九

三十二

濃州赤坂金生山
宝光院古尾之圖

平尾の翫

方れらちぢ
免の字と
彫きり



圓尾の

小口と

摺とれ

ひり



同前

平尾の

小口

摺

金箔

金箔

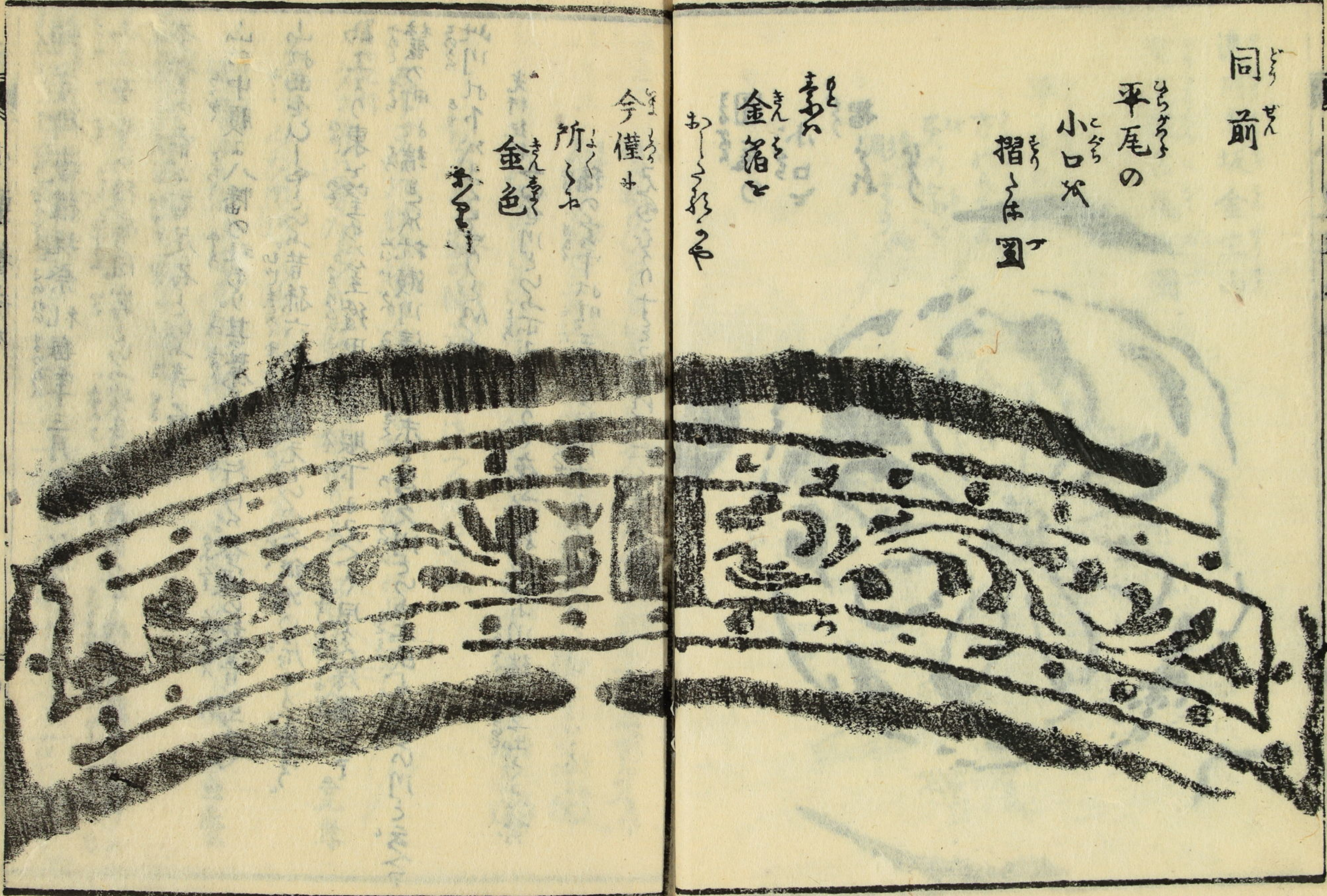
お

今僅

所

金色

お



鎮守御嶽權現奈礼毎年三月十一日なり。

山上奉堂の後屏風岩といふ峻奇の大巖あり。其傍より鈴石と云物出せり。本堂の前は百足石といふ奇石あり。

山の中腹は八幡の社あり。其麓を北へ行けば谷汲の観音へ出せり。

山は西をひしとつ昔孫六入道兼元といふ名鑑治の居たり。其地なり。

山上より東を望めば釜蓋里など眼下見えく。風多々殊勝なり。

林麓の町は端と云抗瀬川流る。其末と呂久川といふ土民をせし川と云ふ。此川は下流と云ふなり。

此川は下流と云ふなり。

先行紀行

あせ川といふ所より夜あけに川端より出せり。

梅の宮中へ時天きよれ川瀬ふる川流る。其地なり。

二里のありは改入の公のひかりなり。

旗のおひしと云ふ所なり。其地なり。

先洛を出て三日に瀬川より宿して一宵志むくゆきんの仲秋

と云物の月をいふはあづきと云ふ事なり。前途千里の雲よ送

などある家の障子も書はつるはらば。

あづきより秋のまねと云ふもかは旅寐れ月をいふ事なり。

富士紀行 夕ま終る香たたくし河の名は板敷といふ事なり。 堯孝

右川紀 くら瀬川といふ所をめぐりて

歩守ゆきにはゆり板瀬川のらららゆるやけと云ふ事なり。 堯孝

右中土と所の図説も前も同じ。

二村山の三洲矢矧の里近き地方なり。一名を丹波尾張といふ。古に名あり。

是より後の三國と。衆星閣の所著よあらばなりども。二村山の
 因は柞のことと并ばは初童のゐらむ生なり。

柞。字彙才落子各。二切木名とあり。

詩析其柞薪しんといふ註ちゆう柞まき標めとあり。

貝系かいけい氏の文和本草ぶんわほんそう小叢せうそう金子木きんぎもと

書て一名柞まきといふ假名かりなをいぬつぎと付つ。

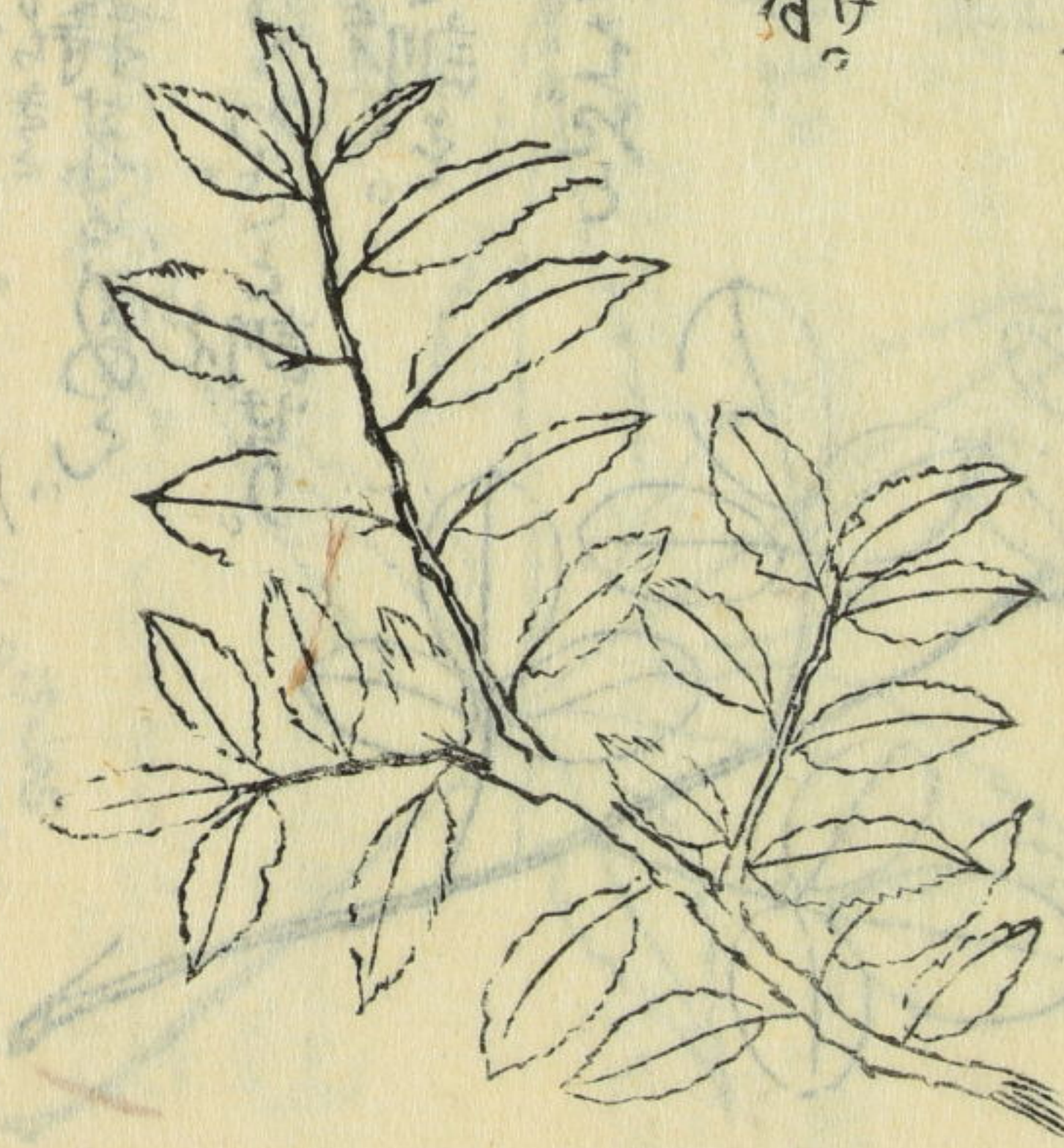
そ条そのぢょう柞まきと芝揚つげゆ似にく。掃か。

作つの又また庭園ていゑんゆも極山木ごくさんぎと。

平原ひらゆも生なを奴ぬ柞まきをいぬつぎと

削えとはと非ひなり。

本叶ほんが小合せうがとあり。



○ととより。説せつあり。かほより。ゆきほより。あり。

なご云なごまじと定さだうまうまは和名抄わななせうととよりと載のせ。

字類抄じりゆうせう。雀すずの字じを。ととよりと訓えじたり。

揚子方言やうしひやうげん。桂林きんりんの中ちゆう謂い難なん曰い雀すずと

入いるり。字彙じ小雀せうすず才さい恭切きやうせつ。

南楚人なんしよじん難なん雀すずと云いとあり。

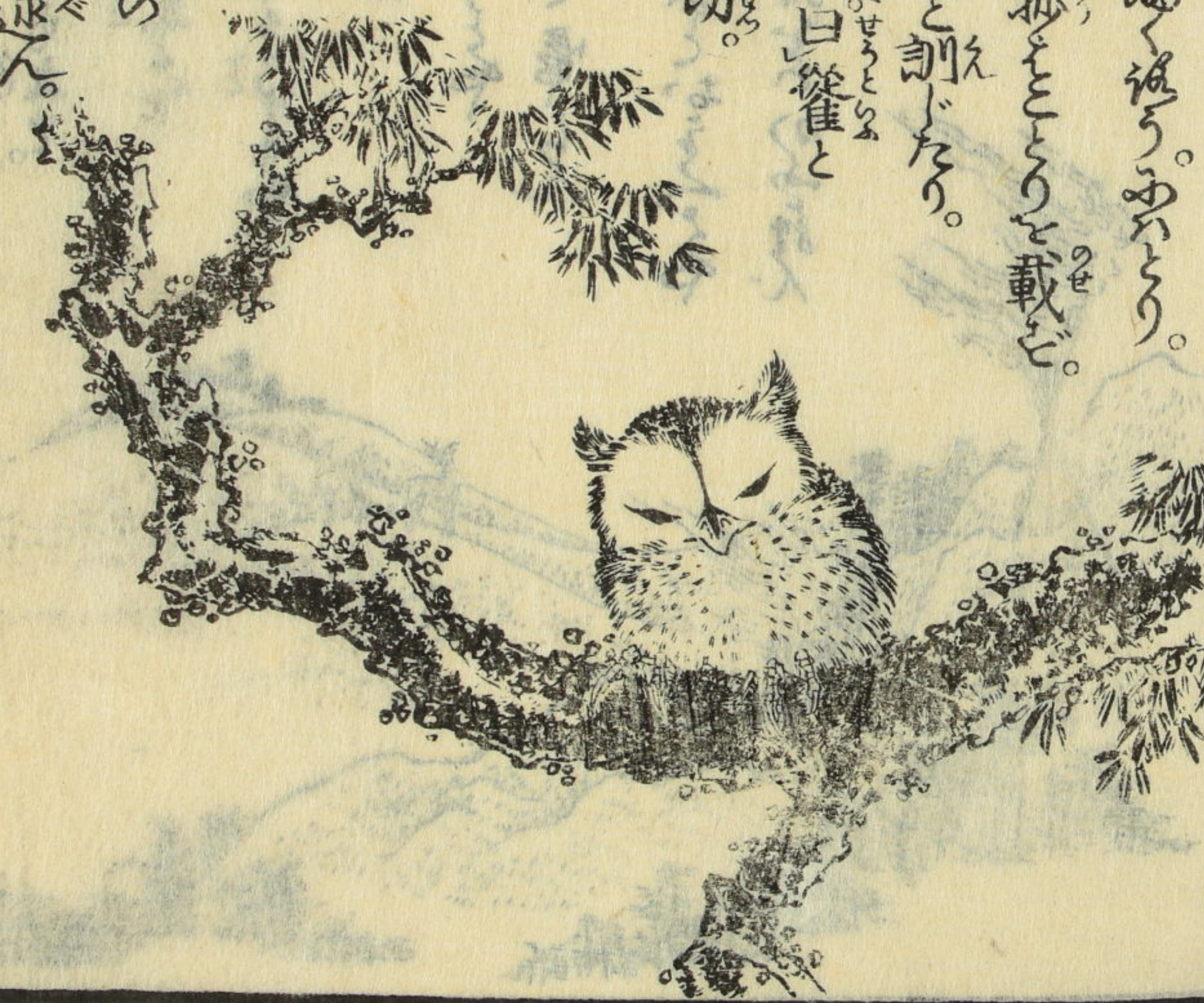
あらあまじと古こにこふ

ふふとと帝ていはと漢わんの鴉あつ非ひ

翠すい難なんとの形かたちとも入いと。

今世いまよの何なにももふうふうああらんらん物ものの

君子くんしとと同どうてて後日こうじつ詳しょうるるふと述のん。



○

とりし。照射とも。火津とも。ま。

闇夜。火津をばして麻のすまを

らひ射とるひや。

金葉

はるまはるの影は

うらむをこそしや

席と常らん

千載

とりしをばしを妻とあはれん

あひんく麻のすまをかあはれん

右の奇をとりしなり。

小栗外傳卷之九畢

